

3. 開拓者をおそう洪水・そして新水路づくりへ

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や
川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

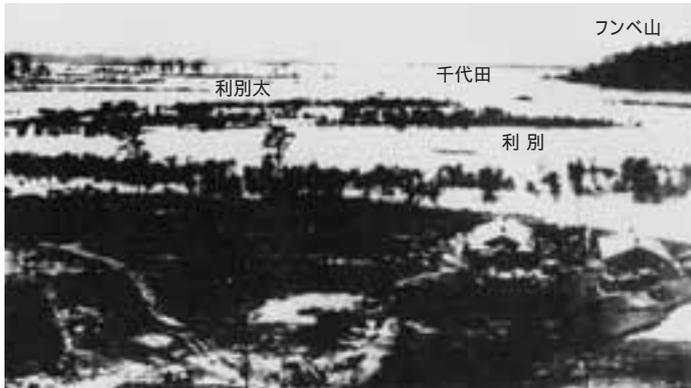
第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん

川に飲みこまれる開拓地



大正11年(1922)の大洪水。清見ヶ丘から見た利別・千代田(池田町)。(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)

明治時代の十勝川は、今とちがって曲がりくねり、堤防もあまり整備されていません。大雨が降ったり、山の雪が一度にたくさんとけたりすると、川はあふれ、川ぞいの開拓地は水に飲みこまれました。

開拓、農業、そして暮らしは、洪水との戦いでもあったのです。

十勝の開拓が一気に進んだ明治29年(1896)以降、たびたび大きな洪水がありました。とくに、明治31年(1898)と大正11年(1922)の洪水は、たくさんの死者が出るなど、すさまじい被害をもたらしました。

多くを失い、別の場所に移り住む人、さらには家族が別れ、はなればなれになった人たちもいました。



洪水の中で大切な馬を死守する開拓者。葦派村(池田町大森)に入植した上徳善七(右ページ)が描かせた絵。(上徳善司氏蔵)

明治31年(1898)の大洪水

9月2日から大雨となり、4日には晴れますが、5日から7日までまた大雨となりました。

利別太(池田町)では、水面がふだんより2mくらい高くなり、統内(池田町・幕別町・豊頃町)では、高台と高台の間が、はば約8kmもの水面となりました。

逃げおくて、流される家の屋根の上で泣きさげ人もいました。首だけ出して流される馬もありました。

流されなかった家もこわれ、ド口をかぶりました。作物がダメになり、多くの人がたくわえた食べ物をなくしました。

十勝での死者は21人、流された家が340軒、水につかったり流されたりした畑はおよそ6,000畝¹にのぼりました。

大正11年(1922)の大洪水

8月24日、台風が近づき大暴風雨となりました。

25日には十勝川全体が大洪水となりました。千代田下流(池田町・幕別町)から大津河口(豊頃町)までの川ぞいの土地が水につかり、一面、湖のようになりました。

粒刈石(池田町川合・昭栄)では、床上6尺(約1.8m)まで水が達した所もありました。

十勝地方の死者は9人、こわれたり流された家が240軒、水につかったり流された田畑が5,000畝¹以上にもなりました。



大正11年(1922)の洪水で、水に入って作業する人(池田駅前)。(写真:『池田町懐かしのアルバム』より)

1 ヘクタール: 面積の単位。1ヘクタールは、100m×100mの正方形の広さ。

2 氾濫(はんらん): 川の水がふだん流れているところからあふれ出すこと。堤防(ていぼう)がある場合は、堤防からあふれ出すこと。

明治31年の大洪水の思い出 ... 「誰も物を言う人はいなかった」

ここでは、「池田町開拓夜話」から、明治31年(1898)の大洪水の思い出を紹介しつづけます。(一部省略)

南部小三郎さんの話

明治三十一年九月六日、七日頃利別川が大氾濫した。川沿いに居た自分達八戸は家財道具を天井につるして、八線の高台地に腰まで水につかり手を取り合って避難した。

高台にやっとたどり着いて後を見ると、自分達の小屋八戸は皆流され、柱が何本か見えただけだった。この三十一年の大洪水で小屋の跡に残っていたのは、鉄びんのふた一つだった。誰も物を言う人はいなかった。

林松太郎さんの話

明治三十一年秋の大洪水で小屋は流され、二晩も田中と一緒に薪の間に野宿した。

この水害の時、八木が丸木船で助けに出た。水は七、八尺位(約2~2.5m)あり、水が屋根までつくと、家がポコンと浮かんで流れていった。

新津とよじさんの話

十勝川の氾濫でそこら一面は泥の海となって家も畑もあったものではありません。命からがら避難するのが精一杯で、家族を呼び合う声が地獄へ落ちていくような痛々しいものでした。

となりの斉藤さんは四斗樽(およそ72リットルの樽)を船の代わりにして命からがらフンペン山へ辿り着いたと、後で聞きましたが、あの恐ろしさは生涯忘れることはできません。

「誰も物を言う人はいなかった」

「川合開拓七人会」の思い出から
入植して数年後、何とか食糧の蓄えも出来て、販売作物を作り始めた時、天は容赦なく大きな試練を下した。

明治三十一年九月の大洪水である。十勝川の東西六キロから八キロにおよぶ流域の平野部を一本の大河と化し、泡立つ濁流が渦を巻いて流れる様は物凄く、入植者達は家も家財も捨てて丸木船で高台地区へ避難した。まして濁流の中に首だけ出して流れ去る馬を助ける術は全く無かった。

この時、平井春吉氏(川合開拓七人会の一人)の家も流失し、また神谷常吉氏(川合開拓七人会の喜作氏の長男)は大木にくくりつけた丸木船の中で、飲まず食わずで二昼夜を過ごしたという。

水害後流失をまぬがれた家とて泥に埋まり、収穫の秋を目前にした作物もまた流失して見る影もなく、鋤を手にする元気もなく、ただ茫然として途方にくれるのみであった。

政府では罹災者一戸当たり五十円の現金と、救助米として南京米の貸付けをしてくれたが、この洪水を契機に入植者の中には危険な川の流域を離れ、高台地や他の土地に移動する者も多くなった。

(『川合開拓七人会』とは、川合地区〔池田町〕で開拓を続けた人たち7人が、昭和26年〔1951〕に結成したもの)
(『川合のあゆみ(1978)』より)

上徳善七さんの話

明治三十一年の大洪水の時は大金を出してようやく手に入れた一頭の馬を守るため、流れそうな家の屋根に上り馬のたづなを引いて助けたものでした。(左ページ絵)

アイヌの人たちによる救助 ... 明治31年の大洪水の記録

明治31年(1898)の大洪水の時には、こんな記録も残っています。(やさしいことば・文に直してあります)

「札内川にかけられていた栗山橋(今の札内橋)は、7日正午12時ころ、流木のために破壊され、人馬の交通がとだえた。(栗山橋 p182)

この橋から下流、十勝川までの間では、札内川の水が十勝川のはげしい流れにさえぎられ逆流したために、安木マツチ製軸所と付近の人家が水につかった。逃げおくれで屋

上で助けを求める人たちがいた。

大変危険な状態にあるのを見て、高地に住んでいたアントマツ、ツウプトアイノ、アシノマツ、カイキマツ、シマキアイノ、チャマート、イタコランら男女7人のアイヌの人たちが丸木舟2艘を出し、激流の中をこぎわたり、安木マツチ製軸所から22人、その隣の家から2人、増田伊吉家7人を救助した」

「帯広市史 平成15年編」より

3 罹災(りさい): 地震・台風・洪水・津波・噴火・火災などといった災害にあうこと。
4 円(えん): 明治31年(1898)の手紙が2銭=0.02円、明治30年(1897)の東京で米10kgが1円12銭=1.12円、映画が20銭=0.2円。(『値段の明治大正昭和風俗史 上下』より)

5 南京米(なんきんまい): インド・タイ・インドシナ(今のベトナム・ラオス・カンボジアなど)・中国などから輸入した米のことを一般にこういった。

十勝川切りかえの対立

国際理解

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



大正6年(1917)、西士狩(芽室町)住民によって、十勝川の流はライベツ川に切りかえられ、のちに、もとの十勝川はほとんどすがたを消した。
(国土地理院所蔵の1/5万地形図(帯広)を使用、着色)

雨の中の実力行使

大正6年(1917)の7月、雨の中、西士狩の住民は美生川合流点に向かいました。美生中島住民の反対をおし切り、十勝川の流れをライベツ川に切りかえようというのです。

これを知った美生中島の住民は、実力でやめさせようとします。また、芽室村の村長も、何とかおさめようとします。

しかし、西士狩住民は切りかえ作業を続け、十勝川はその流れを真東のライベツ川へと変えることになりました。今の流れとほとんど同じになったのです。

その後、美生中島の暮らしには問題が多くなり、住民は新たに暮らす場所を探し、移り住んでいきます。

芽室町の下美生、大成、北伏古、新生などに移る人もいれば、中には遠く南アメリカに移住した人もいました。

少しずつ川の整備は進みましたが、大正時代になって、十勝川は大きく曲がり、枝分かれをしていました。芽室町美蔓から西士狩にかけての十勝川本流は、美生川の合流点から北に大きくカーブしたあと、今の美蔓川にそって南に下っていました。今十勝川が流れているところは細い枝川で、ライベツ(アイヌ語で古い川の意味)川と呼ばれていました。

この十勝川とライベツ川にはさまれたところは美生中島と呼ばれ、明治29年(1896)から岐阜や富山の開拓団体が入植していました。(開拓団体 p166)

一方、十勝川をはさんだ東側の西士狩でも、早くから鈴木銃太郎(晩成社: p158・p143)らに始まる開拓が進み、明治30年(1897)の加賀団体(石川県)などが移住していました。

十勝川をはさんだ対立

明治31年(1898)の大洪水など、十勝川ぞいの開拓地はたびたび洪水によって被害を受けました。

西士狩地区では、上流で大きく曲がった十勝川から水があふれることによる被害が大きく、住民は上流の直線化を望んでいました。

しかし、美生中島地区にとっては、十勝川が北に流れることで、洪水の被害が小さくてすんでいたのです。

十勝川をはさんだ2つの地区の間には、対立が生まれました。



美蔓川が十勝川に合流しているところ(芽室町)。明治時代終わりころの十勝川は、赤い点線あたりを通過して、今の美蔓川下流のところを流れていた。

古い地形図を見る ... 明治29年ころからの移り変わり

地形図は、地形や川、土地利用、集落、道路、鉄道などを正確に表示した地図です。5万分の1のものと、もっとくわしい2万5千分の1のものなどがあります。

土地のようすは、だんだんと変わっていくので、間を置いて調べ直し、そのたびに新しい地形図に直していきます。ですから、古い地形図と最近のものとをくらべると、川の流れや道などの変化がわかるのです。

十勝についての最も古い地形図は、明治29年（1896）につくられたものです（5万分の1だけ。十勝の2万5千分の1地形図は戦後から）。

帯広市街地周辺の地形図を、いくつかならべてみました。変化を見てみましょう。

古い地形図の入手方法は、国土地理院のホームページ（<http://www.gsi.go.jp/>）から「地形図図歴」のページを探すとわかります。



注：たて横に入っている直線は、植民地の区画線で多くが道ではない(道であるところも)



明治29年（1896）製版

この場所で最も古い地形図。

昔は横書きの文字は、右から左へ読んでいました。ただし、カナの小さな文字（ッ、ヨ、エやアイヌ語名のノなど）は、前の文字の右下に書いてあります。

左地図の「ケレペレペオ」は「オペレペレケ」ではなく、「オペレペレケ（今の帯広川）」と読みます。また、「トラバ」は、「パラトー」と読みます。

大正11年（1922）発行

川の流れがかなり変わっています。札内川（とそのまわり）の流れがまとまり、また、札内川と十勝川が、この地図の中で合流しないまま東（右）に向かっていきます。札内川は、この先、おもに今のメン川（幕別町）を流れています（p171）。

白黒の地図は読みにくいので、188ページのように、目的に合わせて色をぬった方がいいかも知れません。

昭和21年（1946）発行

この20年くらいの間に、大きく変わったことは、帯広川（地図には『川廣帯』とある）が、まっすぐな流れにほられていることです。また、よく見ると、札内川や十勝川に堤防がつくられています。

地形図は実際のようすを調べて、直すのに時間がかかります。この地形図の場合は、昭和19年（1944）に調べられています。

平成9年（1997）発行

最近の地形図です。帯広川が札内川に合流しています。

この図は平成8年（1996）に一部修正されたのですが、調査は前の年です。その後の変化は入っていません。

この図の十勝大橋は、ひとつ上の地図と同じ場所にあつて、平成7年（1995）につくられた今の十勝大橋ではありません。新しい地図でも、情報が今のものとは限らないのです。

(このページの地図は、国土地理院刊行・所蔵の1/5万地形図「帯広」を使用。色文字は、もとはどの地図にも入っていません)

1 ホームページ：ホームページ(ウェブサイト)は閉鎖されたり、URL(アドレス)が変更されて、ご覧になれない場合があります。

人がつくれた十勝川 ... 統内新水路

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

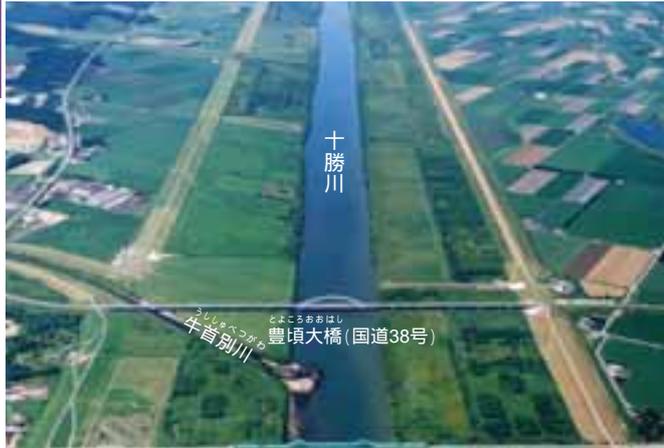
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

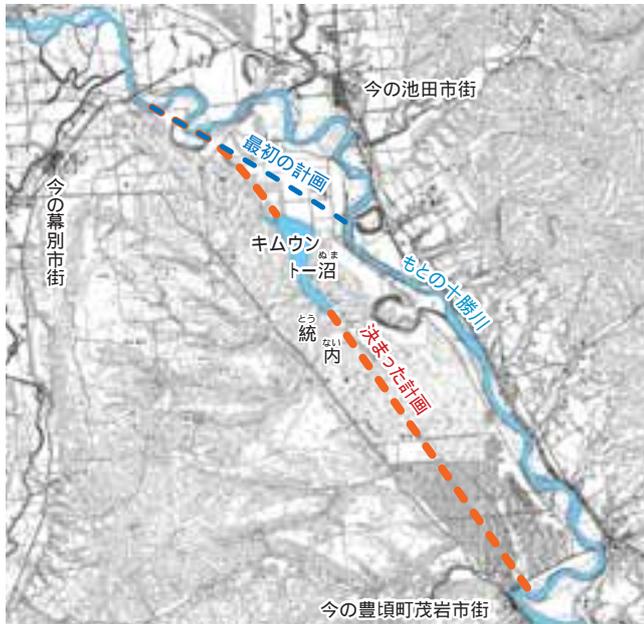
第5章 発展と今、そして未来へ

用語

さくいん



豊頃大橋(豊頃町)から上流の十勝川。このまっすぐな流れは、人がつくれた「統内新水路」。



もとの十勝川(—)と最初の新水路計画(—)と、変更になったあとの計画(—)。(国土地理院所蔵の1/5万地形図を使用、25%に縮小・着色)

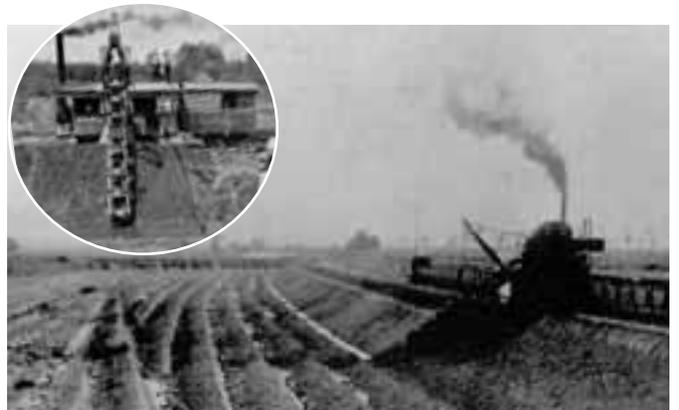
水路をほる「エキスカベーター」²

水路は「ベルトコンベアー式ラダー・エキスカベーター²」という機械が水路ぞいに移動してほっていきました。

この機械は、ベルトコンベアーにいくつものバケツ(バケツのようなもの)がつけてあり、これを回転させることで土をほるものです。

工事現場には、このエキスカベーターが移動するための線路がしかれました。

機械だけではなく、人の力でもほられていて、刑務所の受刑者も活やくしました。



(上) 統内新水路をほるエキスカベーター。(円内) 小型のエキスカベーター。(左) 受刑者が監視されながら働いているところ。

(写真:「十勝川写真で綴る変遷」「十勝川治水史」より)

明治31年(1898)の大洪水をはじめ、川ぞいの農地は何度も洪水の被害をうけます。(p 186)

何とか十勝川の流れをよくして、洪水を減らしたい。そんな開拓者たちの思いは、強くなるばかりでした。

明治時代の終わりから「北海道拓殖計画」が実行されます。その中で、十勝川の下流をまっすぐにするこ

によって、流れをよくしようという計画が立てられました。

さらに、大正11年(1922)の大洪水(p 186)がこの計画をおし進め、昭和3年(1928)工事は始まりました。

工事は、はじめ千代田から川合(池田町)を通り、今の旧利別川へつながるような水路をほる計画でした。しかし、地元に住む人たちから必死の願い(p 192)があったことと、湿地帯の水はけをよくして農地を増やす目的のため、新水路のルートは変更されます。

千代田から茂岩まで15kmをほる

昭和6年(1931) 新しいルートが決まりました。

千代田から、「キムウン トー沼(池田町)」を通って茂岩(豊頃町)まで達する、およそ15kmという水路をつくることになったのです。

これにより、長くスムーズな水路ができる上、豊頃~茂岩(豊頃町)にあった、大きなZ字カーブがなくなることで、十勝川下流全体がかなり直線的になり、洪水の流れがとてよくなることになりました。

さらに、湿地帯が多かった統内原野(池田・幕別・豊頃)にまたがる平野部)の水はけがよくなり、新しく農地をつくりやすくなります。

1 住民からの願い(じゅうみんからのねがい): はじめの予定地である川合地区(池田町)の住民にとって、入植以来洪水(こうずい)とたたかひながら守り、つくり上げてきた畑の土がほられ、堤防(ていぼう)に使われることは許せることではなかった。また、打内太(うちうち)う

つないぶと: 豊頃町北栄)や育素多(いくそ)た: 豊頃町)の住民にとって、もとの十勝川は、洪水によって作物をうばいどる「無くなってほしい川」であった(p 192)

2 エキスカベーター: 土をほる機械のこと。今ではパワーショベルがこれにあたる。

機関車や馬の力で運ぶ土

土運車という、土を運ぶ台車のためにも線路がしかれました。

土運車は連結され、これを蒸気機関車が引っぱって運んでいきました。工事のためだけの蒸気機関車が走っていたのです。ほった土は、堤防をつくるために使われました。

機関車のほかに、馬も土運車を引っぱりました。

馬は昭和35年（1960）くらいまで、機関車は（ディーゼルも入れて）昭和37年（1962）くらいまで、川の工事で活やくしました。



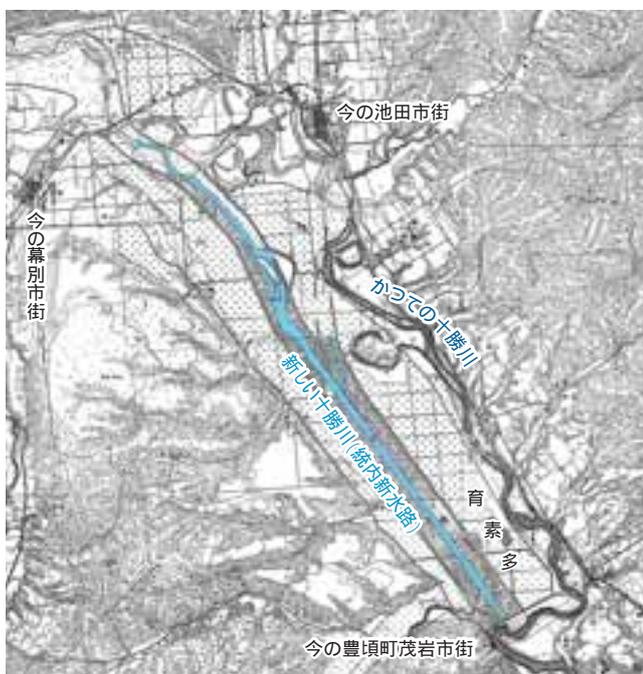
作業をした人たちと、蒸気機関車。左後ろが土運車。



キムウントー沼に土砂を運ぶ馬車。



昭和35年(1960)ころまで、馬車によって土砂が運ばれた。



(上)まっすぐな統内新水路によって、十勝川の水は流れやすくなり、洪水の被害が大きく減った。



(右)昭和12年(1937)、洪水によって新水路に水が流れこんだところ。

洪水による通水

昭和12年（1937）、ほとんどの水路が完成していたときに、洪水が起きました。

この時のことを、昭和10年（1935）から育素多（豊頃町）に移住していた村上五作さんが、のちに書き残しています。

「三年続きの洪水かと、天を仰ぎ、川岸の高地を水が乗り越えて来ないように神に祈った時、奇跡が起きたのです。増水が止まったのです。そして二、三時間後には水が減りはじめたのです（豊頃よもやま話作品集 あかだも『曲がっていた川』より）」

新水路には、工事をするために十勝川から水が入らないよう堤がつくられていましたが、洪水は、この堤を乗り越え、くずして流れこみました。そのため、十勝川の水の量が減ったのです。

こうして、最後は洪水の力で、そして、その洪水の被害を防ぎながら、千代田～茂岩の間に新しい十勝川（統内新水路）が生まれました。

(このページの写真は、4点とも十勝川写真で綴る変遷より、また地図は、国土地理院所蔵の1/5万地形図を使用、25%に縮小・着色)

3 受刑者(じゅけいしゃ): 犯罪をおかし、裁判の結果、刑務所(けいむしょ)に入れられて自由をうばわれた。
4 土運車(どうんしゃ): 土を運ぶ台車(トロッコ)、20トン蒸気機関車は、5合(3m

3) 土運車30両を引く。馬は1合(0.6m³)土運車を4両引く。
5 豊頃よもやま話作品集 あかだも(とよころよもやまばなしさくひんしゅう あかだも): 豊頃町豊寿大学文学科(ほうじゅだいがくぶんがく)編集

“この川さえ無かったらなァ” ... 「魔の川」でもあった旧十勝川

とうないしん すいりょう
 統内新水路のルートは、最初の計画から変えられて
 います。そこには、最初の計画予定地であった川合地
 区（池田町）の人たちの「入植以来洪水とたたかいな
 がら守り、つくり上げてきた畑の土がほられ、堤防に
 使われることは許せない」という声と、打内太（豊頃
 町北栄）や育素多（豊頃町）の人たちの「毎年のよう
 に洪水をもたらす十勝川は、無くなってほしい川だ」
 という思いがありました。（ p190）

昭和63年（1988）、統内新水路の記念碑が建てられた
 ことに寄せた、嵐正義さんの文章を紹介します。

先人たちの勇気を讃えて 嵐 正義

今回、十勝川新水路五十周年記念事業として、「記
 念碑」建立が実現したことに対し、町並びに関係機関
 のご理解とご援助のおかげと、心から感謝申しあげま
 す。

これが実現するに至ったそもそもの起因は、昭和六
 十年（1985）十月、豊寿大学文学科主催の“豊頃よも
 やま話座談会”（北栄、十弗、礼文内地区）での古老の
 ご発言でありました。

この地区の昔を知るためには、先ずもってこの地を
 流れていた旧十勝川の水害を切り離しては語れない位、
 水害に苦しめられた土地柄でありました。

古老方のお話しによりますと、洪水の度に川は母な
 る川から魔の川に変身し、幾多の人命と畜命を奪い、
 更に一年の稔りを根こそぎもぎとり、人々をして、父
 祖が志して入植したこの地を捨て高台地区に移住しな
 ければならない程、苛酷をきわめ、水害は、大なり小
 なり毎年のように襲ったとのことでありました。

そんな折、十弗市街地に説教所を開いて布教活動を
 しておられた泉沢天外師のもとに集まった人たちが、
 茶のみ話の中で、毎年暴れる十勝川への愚痴から、「こ
 の川さえ無かったらなァ」とこぼした一言からヒント
 を得て、この川の流を統内側に変えることが出来な
 いかと話が弾み、「やれるだけやってみよう」とすぐ
 さま行動に移った先達たちは、町に道にと、誠意を持
 って陳情に当られました。

土地を愛し、家族を愛した先達たちの情熱は、地域
 を動かし、行政を動かし、絶対実現しそもない、夢
 物語に等しい“たわごと”を、立派に町づくり、国づ
 くり結びつけたのであります。

せん だつ とう ほん せい そう
 先達たちの東奔西走のご苦労が実り、昭和十二年完
 成された新水路に川の流を切り換えたことにより、
 水害のない現在の肥沃な穀倉地帯に生まれ変わったの
 であります。

これもひとえに、この人たちを後で支えたご家庭
 や、“たわごと”にも似た発想にも、誠意をもって対
 応された町村や道、国のご援助のおかげと、只々、頭
 を下げのみであります。

そして、住民主役の地方自治のお手本として、いつ
 までも町の歴史に残る記念碑建立をのぞむ古老のお言
 葉に私共は感動し、実現のための協力を誓いあったの
 です。

時、あたかも水路完成五十年という節目の年を迎え
 るに当り、文学科にて記念碑建立の趣意書を作り、当
 該地区の区長会に訴えたところ、早速これが実現のた
 めに、地域や行政に図られ、現在に至ったのでありま
 す。

これで水害と闘った当時の人々や、水路変更のため
 に家業を省みず地域のために献身された先達たちのご
 苦労も些少なりとも報われると、喜ぶものであります。

この川との生活に明け暮れた人々の苦しみは、村上
 五作氏が“豊頃よもやま話”（町民芸誌『河口』に
 発表）の中でつぶさに書かれていますので省略します
 が、夢物語りにも等しい発想を採り上げられた行政の



昭和63年（1988）、茂岩橋下流の堤防に建てられた「十勝川統内新水路記念碑」と、あとで後ろに取りつけられたプレート。

1 豊寿大学（ほうじゅだいがく）：豊頃町の高齢者学級。さまざまな分野の「科」がある。
 2 よもやま話（四方山話：よもやまばなし）：いろいろな話。
 3 先達（せんだつ）：ある方面でりっぱな仕事を、あとの人を導く人。先輩（せんぱい）。

4 陳情（ちんじょう）：えらい人、とくに議会や政治家、役所などに今のようすを述べて、何とかしてくれるようたのむこと。
 5 たわごと：ばかげたこと。

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語 さくいん

けつだん ささ せん だつ こう せき えい えん
決断と、それを支えた多くの先達たちの貢績を、永遠
に記念できるこの碑の建立は、正に時期を得た快挙と
して、心からの拍手をおくりたいと思います。

わが郷土豊頃の開拓の歴史の中に、二宮報徳会の偉
業と併せて、この先達たちの偉業も町史を飾ることで
しょうが、最後に私共が古老からお聞きした勇気ある
先達のご芳名を記しましたが、ご芳名の洩れがありま
したらお許し下さい。

- 元豊頃村長 小林 官太 元豊頃村議 美馬 清作
 - 元豊頃村議 石田 平蔵 元豊頃村議 堀田謙次郎
 - 元道会議員 山本与七郎（池田町）
 - 豊頃側住民 山崎惣次郎 豊頃側住民 吉村政治郎
 - 豊頃側住民 竹田 夏樹 川合側住民 神谷 兵作
 - 川合側住民 神谷 常吉 川合側住民 久保田康雄
- （敬称略）
（『豊頃よもやま話作品集 あかだも』より
漢字・かなづかいなどは原文のまま）

上の文章の中に出てきた、村上五作さんによる、水
害の苦しみを描いた文章を一部紹介します。
昭和10～11年（1935～36）、統内新水路の工事が進
む中、しかし、洪水は完成を待ってくれません。明治
31年（1898）や大正11年（1922）の時以外にも、何度
も洪水はおそいかかってきたのです。

曲がっていた川 村上 五作
（前略）治水工事にのぞみを託し、統内原野の夜明け
を信じて、打内太に四戸、育素多地区に九戸の人たち
が住んで居りました。

昭和十年、島流しにされたような不安な気持ちで、
この地に分家して参りました私たち夫婦は、この人々
に暖かく迎えられ、新生活の第一歩を踏み出したので
した。私ども夫婦は、作付の済んだ畑を嬉しさに、一
生懸命除草管理に励み、近所の人たちも賞められるよ
うな作物に発育させました。

ところが、その夏の終りに、早くも一回目の試練が
やってきました。一町二反位作付した辛子を収穫した
その夜から降り始めた雨は、三日三晩降り続き、まだ
雨の晴れぬうちより十勝川は泡立ちをはじめ、その上、
大西風を伴い二十時間位増水が続き、川岸の耕地は見

るまに水没し、刈り取って荷穂に積んであった燕麦等
も、次々と流されてしまいました。

辛子は、手伝いに駆けつけてくれた本家の兄たちに
より二階に上げてもらい、かろうじて助かりましたが、
馬は、膝まで水につかりっぱなしでした。私宅は、普
通地より三尺位高い所にはありましたが、床上二尺、地
上四尺位の水がつかまりました。普通平地では、七尺位の
浸水だったと思います。（1尺＝約30.3cm）

燕麦類は流れ、豆類は全部腐れてしまいました。唯
一の収穫は、辛子三十俵位のものでした。勿論、家の
周りに積んであった薪もすっかり流れ去っていました。

次の年は、父の援助で作付をすることができました。
この年、春先より晴天続きで、「今年は良いでしょう」
と村の古老方も言われるし、私どもも、何とか今年は
穫らせて貰えるだろうと、張り切って作付も終り、小
学校で行われる地域運動会等を見にも行かず、除草に
努力しておりました。

七月の月上旬頃、長い晴天続きで、一雨欲しいと人々
が言っているうちに、待望の雨が降り始めました。七
月十一日だったと思いますが、人々の喜びも束の間、
雨は三日続きの豪雨となり、雨足が白いカーテンのよ
うになって風に送られては降りつぎ、それはすさまじ
いものでした。

四日目の夕方、雨は止みましたが、それから一昼夜
増水し続けました。そして、泥色の水は、畑や野菜を
ことごとく埋没してしまいました。「畑作物は、花時
を外れれば何とかなるものだ」という人々の期待を嘲
笑のように、水の引いて行った後より、豆類は、「ぐ
にやり」と倒れていってしまいました。麦類なども殆
どが枯れ、生き残った物も唯ポーっと実の入らない空
穂がお盆近くになってから出たくらいで、ビートも水
引きの悪い所は腐れてしまいました。（後略 p191）

（『豊頃よもやま話作品集 あかだも』より
漢字・かなづかいなどは原文のまま）



「十勝川統内新水路記念
碑」の位置。豊頃町、茂岩
橋下流の左岸堤防。
礼文内川がもとの十勝川。

6 些少（さしょう）：わずかであること。少し。
7 豊頃よもやま話作品集 あかだも（とよころよもやまばなしさくひんしゅう あかだも）：
豊頃町豊大学文学科（ぼうじゅだいがくぶんがくか）（1）が編集。

8 分家（ぶんけ）：親の家や農地（本家：ほんけ）から出て、新たに一家を構えること。
9 荷穂（にお）：豆やえんばくなどの作物を、クキごと刈り取ったあとがかわすために、
まとめて積みあげたもの。

第1章 十勝の平野や
川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展
そして未来へ

用
語

さ
く
い
ん

水田に水が引けるよう ... 千代田堰堤

地域産業

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

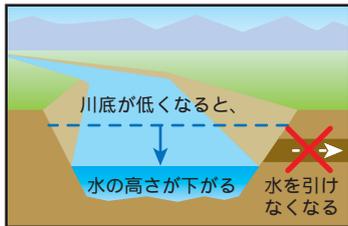
用語

さくいん

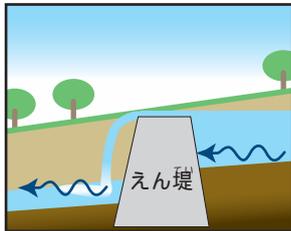


明治時代の終わりころ、千代田(池田町)に広がっていた水田。大正12年(1923)には、十勝川から水路を引くことになる。

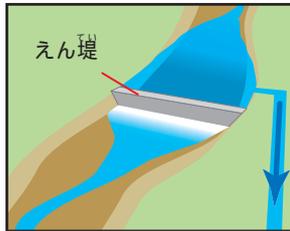
(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)



流れが速くなり、川底がけずられることで、水田への水が引けなくなる。(図はイメージ)



堰堤をつくと、流れが弱まり、川底がけずられにくくなる。



堰堤をつくと、水面を高くできるため、水を引きやすい。

千代田堰堤

千代田堰堤の工事は、昭和7年(1932)から始まり、長さ160m、コンクリートの堰堤です。千代田堰堤をつくることで、十勝川の水をいったんせき止めることができます。すると、水の流れがゆるやかになって川底がけずられにくくなるのと同時に、水面の高さが一定になり、水田への水をいつでも引けるようになります。

水を引くための施設もふくめて、昭和10年(1935)に完成し、千代田地区や利別地区(池田町)などの水田へ水を送りました。

明治26年(1893)、増田立吉が士幌川下流(首更町)で水田に成功しますが、十勝での米作りは大変でした。

開拓者たちの主食は、イナキビや麦、ソバなどで、季節によってはジャガイモやトウモロコシなどになりました。米のごはんを食べることができるのは、正月(とお盆)くらいだったのです。(右ページコラム・p173)

開拓者たちにとって、ふるさとで食べていた米のごはん、そして米作りは大きな夢でした。

蝶多(池田町千代田)でも、明治30年(1897)から米作りへのチャレンジがおこなわれ、明治32年(1899)に成功しました。

明治37年(1904)の豊作から、水田が増えていきます。

そして、大正12年(1923)には十勝川から水路が引かれ、千代田には水田が大きく広がりました。

新水路ができるとう水が引けない？

昭和に入り、千代田(池田町)の下流で統内新水路の工事(p190)が始まります。洪水を減らすために、十勝川の流れをよくする工事です。

ところが、川の流れがよく(速く)になると、川底がけずられるようになります。川底がけずられて低くなると、川の水面も低くなっていきます。そうすると、千代田の水田をうるおしていた水が引けなくなってしまうおそれがありました。

そこで、川の流れをおさえるためと、水田への水を引きやすくするために、堰堤(千代田堰堤)がつけられることになりました。



昭和10年(1935)完成した千代田堰堤。千代田や利別(池田町)の水田をうるおした。(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)

1 蝶多(ちょうた)千代田(ちよだ):池田町の地名。元はアイヌ語のチエオタ(『我ら・食べた・砂場』の意味《永田方正『北海道蝦夷語地名解』》)で、明治初期に蝶多村と当て字し、大正2年(1913)に蝶多が読みにくいと、縁起がいい「千代田」に変えた。

2 堰堤(堰堤:えんてい):川の水や土砂などをせき止めるために、川の流路を横断して建設された構築物のこと。

2段になった千代田堰堤 ... いろいろなところをよく見てみよう

千代田堰堤は、1段でつくられました。しかし、今、千代田堰堤を見ると2段になっています。

千代田堰堤は、農業用水取水せきと川底がけずれて低くなるのを防ぐ施設として、昭和10年（1935）の完成から、何度も洪水にたえてきましたが、少しずつそのダメージを受けました。とくに昭和50年（1975）の洪水の時には、えん堤下流の川底が水の流れて大きくけずられて、そのままではひっくり返るおそれが出てきました。

そこで、よりがんじょうにし、流れ落ちる水の勢いをやわらげるため、えん堤を2段にする工事が昭和51～52年（1976～77）におこなわれたのです。

千代田堰堤の「滝」の流れをよく見ると、下から向かって右側（左岸側）にはげしく流れ落ちる場所があります。えん堤の上はしが落としてあるのです。このすぐ上流に、農業用水を引くための取水口があります。

これは、流れる水の量が少ない時でも、取水口の所に水が集まるようにするための工夫です。

また、昭和51年（1976）の工事の時、魚が川をのぼりやすいようにと、右岸側に魚道もつけられました。

さらに、千代田堰堤のあるあたりでは洪水が流れにくくなっていたことから、平成19年（2007）、千代田新水路がつくられました。千代田新水路には「分流せき」があって、ふだんの水は千代田堰堤へ流し、洪水の時には新水路へも流すということができます。



2段になった今の千代田堰堤。池田町字千代田・幕別町字相川。



えん堤の角が落としてあるところと取水口。



右岸側（4）にある魚道。



千代田新水路、分流せき、千代田堰堤。

米を食べるのは特別なこと ... 盆と正月とお客さんのとき

明治30年（1897）、鳥取県から池田農場に移住した人たちは、池田へ向かう途中休ませてもらった家の人が、イナキビのおかゆを食べているのを見て、「自分達は郷里で米以外は知らなかったのびっくりした」といいます。（池田農場入地者の『昔をしのぶ座談会』）

入植してからは、「米なんかは盆と正月にしか食べられませんでした。お客さんが来るとやはり米のご飯を出したので、その残りが私達子供に当たるので客が来るのが楽しみ（丸山善二さんの話）」という生活になりました。

開拓者の子どもたちが学校で食べた、弁当の思い出を見てください。

「米などは盆か正月ぐらいなもので、普通は稲黍飯に麦やアズキ（小豆）を入れた粗末なものでした（野尻久吉さ

んの話）」
 「明治末期に至り、米も試作されましたが主食を充たすことはできず、麦や稲黍が常食で季節には、唐黍や芋、南瓜の弁当もありました。昼近くになると、暖房のいりりの灰の中に芋を入れて焼いたのも思い出の一つです（堀井忠治さんの話：東台小学校開校記念誌『東台の灯は消えず』）」
 「弁当は稲黍や唐黍の入った握り飯であった（野村慈弘さんの話：池田小学校『開校六十周年記念誌』）」
 「麦や稲黍ばかりで育てられた私はまだ良い方で、十日川の奥から通学していた友だちの中には、毎日の弁当がソバだんごばかりで通っていた人もいたものだ（藤山諭さんの話：下利別小学校『開校六十周年記念誌』）」

（「」の中は『池田町開拓夜話』より）
 （「」内、漢字・かなづかいなどは原文のまま）

3 左岸（さがん）：川の下流に向かって見た時、左側の岸のこと。
 4 右岸（うがん）：川の下流に向かって見た時、右側の岸のこと。